

改訂レッドリスト  
付属説明資料

菌類

平成 22 年 3 月

環境省自然環境局野生生物課

## はじめに

「付属説明資料」は、平成18年12月及び平成19年8月に公表された改訂版レッドリストにおいて新規に掲載された種を基本に、それらの生息状況等を簡潔に解説したもので、本冊子は、その「菌類」版です。

すでに刊行されているレッドデータブックと合わせて、絶滅のおそれのある野生生物の保護を進めていくための基礎的な資料として広く活用されることが望されます。

改訂レッドリストの詳細については、以下のwebページを参照してください。

<http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=7849>

<http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=8648>

<http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=8886>

## 掲載種と解説内容

平成19年8月3日に公表された植物II改訂レッドリストに掲載された菌類166分類群（種・亜種・変種等）のなかから、同リストにおいて新規に掲載された91分類群について、以下の内容を簡潔に解説しました。なお、記載内容は原則としてレッドリスト公表時のものです。

○カテゴリー区分（新ランク及び[新規掲載]の表記）

○目名、科名

○和名

○学名、記載者名

○生息状況等、以下の項目を簡潔に記載

日本における固有性／形態と特徴／分布の概要／

生息地の現況とその動向／存続を脅かしている原

因とその種の危機の状況／保護対策

○参考文献

## 執筆

執筆はつぎの方々にお願いし、執筆者名を種ごとの記載の末尾に明記しました。

浅井郁夫

内山 茂（日本冬虫夏草の会）

糟谷大河（筑波大学）

工藤伸一（甲葦塾菌葦研究会）

根田 仁（森林総合研究所きのこ・微生物研究領域）

服部 力（森林総合研究所関西支所）

吹春俊光（千葉県立中央博物館）

細矢 剛（国立科学博物館植物研究部）

## 今後の対応

環境省では、レッドリストや本冊子について広く普及を図ることで、絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存への国民の理解を深めるとともに、関係省庁や地方公共団体等に配布することにより各種計画における配慮等を促す予定です。

また、レッドリストの掲載種の中で特に保護の優先度が高い種については、さらに生息状況等に関する詳細な調査の実施等により情報収集を行い、その結果及び生息・生育地域の自然的・社会的状況に応じて「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」に基づく国内希少野生動植物種に指定する等、必要な保護措置を検討します。

なお、レッドリストは、今後とも、5年ないし10年ごとに再調査と見直しを行う必要があるものと考えられます。

環境省自然環境局野生生物課

ハラタケ目 ヒラタケ科

EX (絶滅) [新規掲載]

## 和名なし *Lentinus lamelliporus* Har. & Pat.

日本固有種。傘は、径30~45mm、丸山形で中央がくぼみ、表面は白色から淡紅褐色で平滑。ひだは密で垂生し、柄に近い部分では連絡脈ができるで浅い管孔状になる。柄は偏心生で短く 13~18mm×8~10mm、中実、表面は黄色みを帯びる。傘肉は薄い。菌糸組織は、生殖菌糸と結合菌糸からなる。担子胞子は円筒形、4.2~7×2.2~3μmで、同属の他の菌よりも小さい。Hyphal pegは多い。木材上に発生する。1902年に東京で採集され、新種記載されたが、それ以後の採集記録はない。絶滅したと考えられる。

【参考文献】 10)、80)

執筆者：根田 仁（森林総合研究所）

ハラタケ目 ヒラタケ科

EX (絶滅) [新規掲載]

## ヘゴシロカタハ *Pleurotus cyathaeae* S. Imai

日本固有種。傘は、径10~30mm、腎臓形から扇形で、白色から淡黄色、基部には白い長軟毛があり、周辺は巻き込み、条線はない。ひだは密で、やや垂生からやや狹生し、白色で、のちに黄色っぽくなる。柄は側生し、10×7mm以下で、白色、白色の毛がある。胞子紋は白色。担子胞子は長楕円形から長楕円形、平滑、無色、7.5~10×3~4μm。菌糸組織は、生殖菌糸と骨格菌糸からなる。ヘゴ材上に発生する。1936年に小笠原で採集され、新種記載されたが、それ以後の採集記録はない。絶滅したと考えられる。

【参考文献】 27)、74)、75)

執筆者：根田 仁（森林総合研究所）

ヒダナシタケ目 ニンギョウタケモドキ科

EX (絶滅) [新規掲載]

## アミラツバタケ *Albatrellus cantharellus* (Lloyd) Pouzar

日本固有種。子実体は有柄、漏斗形、全体の高さは2~4.5cm。傘は径1.5~4cm、円形、傘表面は淡黄色~淡褐色、乾燥後帶灰色、ビロード状。傘肉は白色、薄く脆い。子実層托は管孔状、孔口面は類白色。柄は中心生、円筒形、表面は類白色、長さ1.5~3cm、径4~10mm。担子胞子は短楕円形、アミロイド、4.7~6.6×4~5μm。林内地上に発生する。1914年に宮城県から採集された標本に基づいて新種として記載された。その後採集記録がなく、絶滅したものと考えられる。

【参考文献】 25)、85)

執筆者：服部 力（森林総合研究所）

ヒダナシタケ目 マンネンタケ科

EX (絶滅) [新規掲載]

## ニセカンバタケ *Ganoderma colossus* (Fr.) C.F. Baker

子実体は無柄、半円形、丸山形、しばしば大型で幅50cmに達する。傘表面は淡褐色~黄褐色でややニス状光沢をもつ。傘肉はやや脆い纖維質で類白色。子実層托は管孔状。担子胞子はマンネンタケ型、12~14.5×9.5~10.5μm。しばしば傘肉中に厚壁胞子を形成する。熱帯地域に広く分布するが、いずれの分布地でも稀。広葉樹、稀にヤシ類上に生じる。国内では1947年に宮崎県で一度採集されたが、それ以後、自然環境下では約60年間採集記録がなく、国内産個体群は絶滅したものと考えられる。

【参考文献】 25)、76)

執筆者：服部 力（森林総合研究所）

肉座菌目 麦角菌科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## ミオモテタンボタケ *Cordyceps miomoteana* Kobayasi & Shimizu

日本固有種。子実体は地下生のツチダンゴ (子囊菌 *Elaphomyces*) に生じる。長さ約 5cm、太さ約 4mm の淡灰白色、円柱状の柄の先端に暗灰白色、径 6~9mm の球形の稔果部を形成する。柄の上部にササクレを生じ、地下部は仮根状に分岐して宿主と繋がる。子囊殻は稔果部に埋生し、卵形、770~800×350~430μm。子囊は 400×4μm。子囊胞子 (2 次胞子) は矩形、8~11×1.5~2μm。1966 年に新種記載されたが、発生地である新潟県三面渓谷のブナ林が伐採され、近年の発生が確認できていない。今後消滅する可能性が高い。

【参考文献】 40)、55)、88)、89)

執筆者：内山 茂 (日本冬虫夏草の会)

肉座菌目 麦角菌科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## シロハナヤスリタケ *Cordyceps ophioglossoides* f. *alba* Kobayasi & Shimizu ex Y. J. Yao

日本固有種。子実体は地下生のツチダンゴ (子囊菌 *Elaphomyces*) に 1~数本生じ、全体が白色。地上部は高さ 3~7cm。径 2~3mm の円柱状の柄の先端に 20~33×3~8mm の円筒形から橢円形の頭部を形成する。地下部は細根状に分岐して宿主と繋がる。子囊殻は頭部に埋生して形成され、卵形、530~580×180~300μm。子囊胞子 (2 次胞子) は矩形、2~5×1.5~1.8μm。1961 年に福島県稻子のブナ林床で採集されたが、その後発生地の伐採が進み、近年の発生が確認できていない。今後消滅する可能性が高い。

【参考文献】 36)、88)、89)

執筆者：内山 茂 (日本冬虫夏草の会)

肉座菌目 麦角菌科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## アブヤドリタケ *Cordyceps ovoideoperitheciata* Kobayasi & Shimizu

日本固有種。子実体はアブの幼虫の頭部に単生し、白色、根棒状。地上部の高さは約 4cm。上部に子囊殻が裸生し、長さ 12mm、径 2mm の稔果部を形成する。子囊殻は卵形、500~550×300~350μm。子囊は径 5~6μm、先端の肥厚部分は径 4μm。子囊胞子 (2 次胞子) は 3~5×1.5μm。1980 年に山形県戸沢村今神山の沢沿いで採集され 1982 年に記載されたが、発生地のブナ林の伐採が進みその後の発生が確認できていない。今後消滅する可能性が高い。

【参考文献】 40)、58)、88)、89)

執筆者：内山 茂 (日本冬虫夏草の会)

肉座菌目 麦角菌科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## シロタマゴクチキムシタケ *Cordyceps deflectens* Penz. & Sacc.

子実体は朽木中あるいは小枝中の空洞に産卵された不明昆虫の卵塊から生じ、全体が純白色の太針状、長さ 2~3cm、径約 1mm。子囊殻はトックリ状の卵形、370~430×270~300μm、子実体上部に裸生し、長さ 5~10mm の稔果部を形成する。子囊は径 4~5μm、先端の肥厚部分は径 2.5~3μm。子囊胞子 (2 次胞子) は矩形、5~6×1μm。1904 年にジャワ島産のもの (鱗翅目幼虫生として) で記載された後、1950 年に埼玉県両神山で採集された。台湾、八丈島、御藏島からの採集記録があるものの個体数は限られ、環境劣化が進むと消滅する可能性が高い。

【参考文献】 40)、49)、82)、88)、89)

執筆者：内山 茂 (日本冬虫夏草の会)

肉座菌目 麦角菌科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## ミドリトサカタケ *Cordyceps indigotica* Kobayasi & Shimizu

日本固有種。子実体は広葉樹の地際部やイタドリの塊茎部などに穿孔するコウモリガの幼虫に生じ、長さ 4~7cm、淡青緑色で纖維肉質。子囊殼は洋梨形、700~750×275~325 $\mu\text{m}$ 、子実体上部に斜埋生し、長さ 20~25mm、径 7~10mm の紡錘状の稔果部を形成する。柄は径 3~6mm、不規則な縦皺がある。子囊胞子 (2 次胞子) は矩形、4.5~5×1 $\mu\text{m}$ 。1953 年に宮崎県尾鈴山麓で採集され、その後、京都府、山形県などでも採集されるが、個体数も少なく、いくつかの発生地では環境が悪化しており、今後環境の悪化が進むと消滅する可能性が高い。

【参考文献】 40)、46)、88)、89)

執筆者：内山 茂 (日本冬虫夏草の会)

肉座菌目 麦角菌科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## イネゴセミタケ *Cordyceps inegoensis* Kobayasi

日本固有種。子実体はエゾゼミまたはミンミンゼミの幼虫に生じ、棍棒状、地上部は高さ 2.7~4cm。子囊殼は子実体上部に半裸生し、洋梨形、520~550×260~280 $\mu\text{m}$ 。オリーブ色から暗緑灰色の径 5~7mm の円筒状の稔果部を形成する。柄は白色、円柱状、肉質、径 3~4mm。子囊は 400~450×7~7.5 $\mu\text{m}$ 、先端の肥厚部分は径 5~6.5 $\mu\text{m}$ 。子囊胞子 (2 次胞子) は矩形、2.5~3×3 $\mu\text{m}$ 。1958 年に福島県稻子山地で採集され、その後山形県でも採集されるが、発生地は限定され個体数も少なく、今後環境の悪化が進むと消滅する可能性が高い。

【参考文献】 40)、42)、88)、89)

執筆者：内山 茂 (日本冬虫夏草の会)

肉座菌目 麦角菌科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## カンザンセミタケ *Cordyceps kanzashiana* Kobayasi & Shimizu

日本固有種。子実体はイワサキゼミまたはイワサキヒメハルゼミの幼虫に生じ、地上部は高さ 2~4cm。柄は淡褐色でやや硬い纖維質、径 3~5mm、上方で 2~6 本分岐し、各分枝の先端及び途中に黄白色~橙黄色、径 2~7mm の楕円形の稔果部を数珠状に形成する。子囊殼は稔果部に埋生し、細口のビン形、900~1050×270~300 $\mu\text{m}$ 。子囊は太さ 3 $\mu\text{m}$ 、先端の肥厚部分は径 3 $\mu\text{m}$ 。子囊胞子 (2 次胞子) は矩形、3.5×1 $\mu\text{m}$ 。生息地は西表島の照葉樹林に限定され発生する個体数も少なく、発生地の環境劣化により消滅する可能性が高い。

【参考文献】 40)、59)、88)、89)

執筆者：内山 茂 (日本冬虫夏草の会)

肉座菌目 麦角菌科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## ナガボノケンガタムシタケ *Cordyceps obliquiordinata* Kobayasi & Shimizu

日本固有種。子実体は甲虫の幼虫の口器から単生し、地上部は太針状、淡黄色から淡クリーム色、高さ 3~5.3cm、径約 2mm。地下部は細根状に分岐する。子囊殼は卵型、420~480×300~330 $\mu\text{m}$ 、子実体上半分に斜埋生し、長さ 2.3~4cm の稔果部を形成する。子囊胞子 (2 次胞子) は矩形、7~18×0.8~1 $\mu\text{m}$ 。1979 年に山形県真室川で採集された未熟個体で新種記載され、その後群馬県川原湯で成熟個体が採集された。個体数も極めて少なく、群馬県の発生地はダム建設による環境破壊が進み消滅が危惧される。

【参考文献】 54)、88)、89)

執筆者：内山 茂 (日本冬虫夏草の会)

肉座菌目 麦角菌科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## クビオレカメムシタケ *Cordyceps pentatomae* Koval

子実体はカメムシの成虫に1~数本生じ、地上部は高さ2~5cm。淡褐色の柄の上部に5×3.5mmほどの橢円形から枕状の稔果部を背着して湾曲する。子囊殻は稔果部に埋生し洋梨形、400~780×200~280μm。子囊は211~220×5~6μm。子囊胞子(2次胞子)は矩形、3~6×1~1.5μm。1959年にロシア Kedrovajaで採集された標本をKovalが1964年に記載、その後、宮城県、山形県のブナ林で採集されているが個体数は極めて少ない。ロシア、日本国内以外では韓国からの採集報告があるが、日本では発生地の環境劣化により消滅する可能性が高い。

【参考文献】 40)、43)、64)、88)、89)

執筆者：内山 茂 (日本冬虫夏草の会)

肉座菌目 麦角菌科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## ハネカクシヤドリタケ *Cordyceps staphylinidicola* Kobayasi & Shimizu

日本固有種。子実体はハネカクシの幼虫の頭部から単生し棍棒状、長さ5.5cm。宿主は白色菌糸膜で覆われる。子囊殻は子実体の上端に埋生し、卵形、300×100~110μm。長さ5.5~8mm、径1.5~2.2mmのレモン色の稔果部を形成する。柄は円柱状、淡レモン白色、径1.5~2mm。子囊は150~180×3μm、先端の肥厚部分は径3μm。子囊胞子(2次胞子)は矩形、3~4×1μm。1980年に山形県戸沢村で採集され1982年に新種記載された。2003年に北海道で発生したものそれ以外の発生記録はない。発生地の環境劣化により消滅する可能性が高い。

【参考文献】 40)、51)、88)、89)

執筆者：内山 茂 (日本冬虫夏草の会)

ハラタケ目 キシメジ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## ヤチヒロヒダタケ *Armillaria ectypa* (Fr.) Lamoure

子実体はカヤタケ型。傘は径2.5~10cm、淡黄土色、中央部は暗褐色の圧着した微細な鱗片を密生する。ひだは多少湾生、ときにやや垂生、淡黄白色、やや疎。柄はつばを欠き傘とほぼ同色、表面は纖維状、根もとが棍棒状に膨らみ、しばしば紡錘状を呈する。根状菌糸束は発達しない。担子胞子は卵形~橢円形、無色、平滑、7~11×5~7.5μm。日本(青森、群馬、京都)、ヨーロッパに分布するが、国内では現在は青森県内の休耕田と京都府の湿原のみから知られている。その多くは生育環境の消滅が懸念され、生存が著しく脅かされている。

【参考文献】 65)、73)

執筆者：工藤伸一 (甲草塾菌草研究会)

ヒダナシタケ目 サルノコシカケ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## カンバタケモドキ *Polyporus pseudobetulinus* (Murashk. ex Pilát) Thorn, Kotir. & Niemelä

子実体は短い柄を有する~ほとんど無柄。傘は幅15cmに及ぶ、傘表面は淡黄色~淡褐色で纖維状紋をもつ。傘肉は強靭な肉質で白色。子実層托は類白色、管孔状。担子胞子は円筒形、7~10×2.5~3.5μm。北半球の寒冷地域に分布する。ヤナギ科樹木の生木または枯木上に生じる。国内では北海道の高原地域数か所のヤナギ上のみから知られており、全生育地で発生が稀である。国内での生育地は本種の分布の南限にあたり、今後温暖化の進行により生育地が狭まると絶滅の可能性が高い。

【参考文献】 77)

執筆者：服部 力 (森林総合研究所)

ケシボウズタケ目 ケシボウズタケ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## オニノケヤリタケ *Queletia mirabilis* Fr.

子実体は幼菌時球形、約 2.5~4cm、黄白色、地中や木片内に埋生。成熟すると中実纖維質の柄が伸長し高さ約 10cm となる。柄の先端に頭部があり、はじめ白~黄白色、担子胞子の成熟とともに殻皮が不規則に剥落し、褐色の胞子塊が露出する。頭部と柄部は離れやすい。北米、欧洲に分布する。日本では 1986 年に長野県小諸市の木片や樹皮が混じる木材置場で初めて採集され、それ以降記録がない。分布の実態や生育環境も不明な点が多く、現在知られている発生地の環境が失われれば消滅する可能性が高い。

【参考文献】 3)、23)

執筆者：吹春俊光（千葉県立中央博物館）

スッポンタケ目 スッポンタケ科

CR+EN (絶滅危惧 I 種) [新規掲載]

## アカダマスッポンタケ *Phallus hadriani* Vent.

菌蕾は球形~卵形、白色、空気に触れると紫色~赤褐色。成熟し托が伸長すると高さ 11~22cm、類白色~クリーム色。傘は円錐形~釣鐘形、高さ 3~4cm、表面は網目状で頂部は截断状。グレバは粘液状、褐色~黒褐色。刺激臭を発する。海浜生植物が繁茂する砂浜海岸に、夏~秋に単生~群生する。北米、北アフリカ、欧洲、中央アジア等に分布し、日本では東京、新潟、北海道の海岸から記録されている。分布が局在しており、自然で良好な海浜砂地の開発による急激な減少・悪化に伴い、今後消滅する可能性が高い。

【参考文献】 30)

執筆者：吹春俊光（千葉県立中央博物館）／糟谷大河（筑波大学）

スッポンタケ目 スッポンタケ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## キアミズキンタケ *Simblum periphragmoides* Klotzsch

ヤシ科植物が優占する湿潤な亜熱帯林に、夏~秋に発生する。菌蕾は球形~卵形、白色、成熟し托が伸長すると高さ 5~10cm、クリーム色~淡い黄色。托の上部には淡い黄色~黄色で網目・カゴ状で球形の頭部をもつ。グレバは粘液状で頭部に形成され、オリーブ色~褐色。腐った果実臭を発する。インド洋西部のモーリシャス島で記載された種で、インド、セイロン、ジャワ島、台湾等に分布する。日本では沖縄県石垣島の亜熱帯林から知られ、現存する生育地は 1 か所のみ。生育地の環境劣化により、今後消滅する可能性が高い。

【参考文献】 33)、78)

執筆者：吹春俊光（千葉県立中央博物館）／糟谷大河（筑波大学）

チャワントケ目 クロチャワントケ科

VU (絶滅危惧 II 類) [新規掲載]

## キツネノサカズキ *Galiella japonica* (Yasuda) Y. Otani

日本固有種。春~初夏、アカマツ林内のアカマツ腐植あるいは落枝より生じる。幼時は洋梨型で直径 2cm 内外、その後上部が星状に裂けて子実層を露出。柄の基部に黒色の菌糸束が付着。子実層は新鮮時褐色~肉桂色、乾燥時チョコレート色。子囊は円筒形、厚壁。子囊胞子は 25~38×11~14μm、表面に小突起あり。側糸は糸状、幅 3μm、上部はわずかに膨大して、褐色顆粒を含む。きわめて稀にしか採集されず、基質特異性が高いと推察され、アカマツ林へのダメージによって生育環境が悪化し、消滅するおそれがある。

【参考文献】 79)

執筆者：細矢 剛（国立科学博物館）

肉座菌目 麦角菌科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## タンボヤンマタケ *Cordyceps odonatae* Kobayasi

子実体は樹枝などにとまったトンボの成虫の体節部分に生じ、淡黄褐色、長さ3~5mm、先端は卵形、球形からハスノミ形、径1.5~2mmの稔果部となる。子囊殻は稔果部上面に埋生し細ロビン形、1,000~1,150×300~350μm。アナモルフのヤンマタケ *Hymenostilbe odonatae* は各地の溪流畔、湿地、滝の周辺などにやや普通に発生するが、子囊殻が成熟するものは日本国内では極めて稀。1926年にニューギニア島の採集品で新種記載され、その後茨城県御前山村、京都府で採集された。茨城県の発生地はダム建設による環境破壊が進んでいる。

【参考文献】 37)、40)、88)、89)

執筆者：内山 茂（日本冬虫夏草の会）

肉座菌目 麦角菌科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## エゾハナヤスリタケ *Cordyceps jezoensis* S. Imai

日本固有種。子実体は黒色のツチダンゴ（地下生の子囊菌 *Elaphomyces*）に生じ棍棒状。地上部は高さ5~8cm、柄は白色、円柱状、径約3mm、地下部は細根状に分岐して宿主と繋がる。子実体先端の稔果部は倒卵形から橢円形、淡オリーブ色~帶緑灰褐色、20~28×6~8mm。子囊殻は稔果部に埋生し、長橢円形、770~720×200~250μm。子囊は450~500×13~19μm。子囊胞子（2次胞子）は両端が丸みを帯び、20~30×3~4.5μm。1928年に北海道野幌で採集、新種記載された。その後確認された山形県などの発生地は部分的に環境が劣化しつつある。

【参考文献】 19)、40)、88)、89)

執筆者：内山 茂（日本冬虫夏草の会）

肉座菌目 麦角菌科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## トビシマセミタケ *Cordyceps ramosopulvinata* Kobayasi & Shimizu

日本固有種。子実体はアブラゼミ、ミンミンゼミ、ヒグラシなどの幼虫に生じ、地上部は高さ2~4cm、上方で数本に分岐する。柄は淡黄褐色、径3~4.5mm。各分枝の先端に径2~5cmの球形から橢円形の稔果部を形成する。子囊殻は稔果部に半埋生し、洋梨形、750~925×275~300μm。子囊は太さ3.5~5μm、先端の肥厚部分は径3~5μm。子囊胞子（2次胞子）は矩形、3×1μm。1980年に山形県の飛島で採集され、その後八丈島などの生息地が確認されているが、局在的で個体数も少なく、環境劣化が懸念される。

【参考文献】 40)、60)、88)、89)

執筆者：内山 茂（日本冬虫夏草の会）

肉座菌目 麦角菌科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## クビナガクチキムシタケ *Cordyceps subsessilis* Petch

湿った朽木中のクチキカ類の幼虫から生じ、朽木の表面上に径2.5~4.5mm、白色、綿質の円盤状のスベリクルを形成し、その上に子囊殻を半裸生する。山形県朝日岳山麓で見つかった後、青森県奥入瀬渓谷などで採集されているが、奥入瀬の発生地では、宿主が生息する朽木が処分され個体数が減少している。なお、小林ら及び海外の研究者が本菌の宿主を甲虫類の幼虫とし、*Cordyceps facis* を本種の同種異名としているが、小林らの原図に示されている本菌の宿主は、双翅目のクチキカ類の幼虫であることが判明している。

【参考文献】 40)、45)、83)、88)、89)

執筆者：内山 茂（日本冬虫夏草の会）

ハラタケ目 キシメジ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## バカマツタケ *Tricholoma bakamatsutake* Hongo

子実体はキシメジ型。傘は径 4~10cm、くり褐色~褐色、表面ははじめ纖維状、のち裂けて鱗片状となる。肉は白色、ち密、マツタケに似た香氣がある。ひだは湾生し、白色、密。柄は上下同幅か、やや根もとが太く、中実。纖維状膜質のつばをもち、それより下は傘と同様の纖維状鱗片に被われる。胞子紋は白色。担子胞子は類球形~広楕円形、無色、平滑、 $5.5 \times 4.5 \sim 5.5 \mu\text{m}$ 。日本、中国、ニューギニアに分布。ミズナラやシイ・カシ類等のブナ科広葉樹雜木林に強く依存する菌根菌である。生育地の多くは開発等により環境が著しく悪化している。

【参考文献】 22)

執筆者：工藤伸一（甲葦塾菌蕈研究会）

ヒダナシタケ目 ホウキタケ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## ササナバ *Ramaria campestris* (K. Yokoy. & Sagara) R.H. Petersen

日本固有種。主にネザサ草原の地上に生じる。子実体はサンゴ型で円筒状の基部から樹枝状に分岐、傘はつくれない。淡黄色~黄褐色。傷つけると紫色に変色する。担子胞子は子実体表面に形成され、長楕円形で黄褐色、表面に細かいとげを帯びる、 $11 \times 14 \times 5 \sim 7 \mu\text{m}$ 。現在、大分県を中心とした九州のネザサ草原等 10 数か所から確認されている。生育地の多くは人為的な野焼き等によって維持されており、面積が減少しつつある。今後、生育地の管理状況によっては激減する可能性がある。

【参考文献】 23)

執筆者：服部 力（森林総合研究所）

ヒダナシタケ目 イボタケ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## シシタケ *Sarcodon imbricatus* (L.) P. Karst.

子実体は漏斗形。傘は径 5~25cm、茶褐色で、れんが状にひび割れた濃褐色~黒褐色の大きな鱗片に被われる。肉は淡褐色、弾力があり、肉質。子実層托は針状で柄に垂生する。針は長さ 1cm 程度で密生し、はじめ灰白色、のち濃褐色となる。柄は太短く、中心生、中実、強靭、表面平滑で淡褐色。担子胞子は類球形でイボに被われ、褐色、 $7 \times 8.5 \times 4.5 \sim 5 \mu\text{m}$ 。日本、ヨーロッパ、北アメリカに分布。マツ林等に依存する菌根菌であり、その発生は稀である。生育地の多くはマツ枯れや手入れ不足から環境が著しく悪化している。

【参考文献】 23)、81)

執筆者：工藤伸一（甲葦塾菌蕈研究会）

ヒダナシタケ目 ニンギョウタケモドキ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## ニンギョウタケモドキ *Albatrellus ovinus* (Schaeff.) Kotl. & Pouzar

子実体は有柄、傘は径 3~10 cm、ほぼ円形~不定形で表面は類白色~淡褐色、細かいひびわれ模様をもつ。傘肉は類白色で柔軟な肉質。子実層托は管孔状。柄は中心生~やや偏心生、円筒形で類白色~淡褐色。全体の高さは 10cm 以下。担子胞子は卵形~短楕円形、 $4 \times 5 \times 3 \sim 3.5 \mu\text{m}$ 。マツ、モミ、トウヒなどの針葉樹林の地上に発生、菌根を形成すると考えられる。北半球に広く分布する。国内でも従来広く分布したが、マツ枯れや林の手入れ不足から、本州中部以南のマツ林では発生が激減している。

【参考文献】 23)

執筆者：服部 力（森林総合研究所）

ヒダナシタケ目 ニンギョウタケモドキ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## ヌメリアイタケ *Albatrellus yasudae* (Lloyd) Pouzar

子実体は有柄、傘は径2~7cm、ほぼ円形~不定形で表面は灰青色~濃藍色、湿時は強い粘性をもつが乾燥すると縮んで光沢を示し暗色になる。傘肉は類白色、柔軟な肉質。子実層托は管孔状、孔口面は類白色。柄は中心生~やや偏心生、円筒形で類白色。担子胞子は橢円形、4.5~5×3.3~4.4  $\mu\text{m}$ 。日本、中国に分布。マツを交えた雑木林の地上に群がって発生、菌根を形成すると考えられる。国内に広く分布するものの、安定した生育地は少ない。マツ枯れの影響や里山の開発・自然遷移により発生が減少している。

【参考文献】 23)、85)

執筆者：服部 力（森林総合研究所）

ヒダナシタケ目 タバコウロコタケ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## アラゲカワウソタケ *Inonotus cuticularis* (Bull.) P. Karst.

子実体は無柄、全体に褐色~黄褐色。傘は半円形、幅3~10cm、最初表面に短毛をもつが老成すると無毛で粗面になる。傘肉は黄褐色、強靭な纖維質。子実層托は管孔状、孔口面は褐色。傘表面には分岐した剛毛状菌糸をもつ。担子胞子は短橢円形、黄褐色、6~8×4.5~5.5  $\mu\text{m}$ 。広葉樹枯木上に発生。北米および東アジアに分布。北米では普通種であるが、国内での発生は稀で数か所の暖温帯老齢林から知られている。暖温帯林の伐採、開発により生育地が著しく減少している。

【参考文献】 76)

執筆者：服部 力（森林総合研究所）

ヒダナシタケ目 タバコウロコタケ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## ナンバンオオカワウソタケ *Inonotus patouillardii* (Rick) Imazeki

子実体は無柄、全体に褐色~暗褐色、傘は半円形、幅20cmに達する。傘表面ははじめ微毛をもつが後に無毛でひびわれる。傘肉は褐色、強靭な纖維質。子実層托は管孔状、孔口面は褐色。管孔には剛毛状菌糸をもつ。担子胞子は短橢円形、褐色、5~7×3.5~5  $\mu\text{m}$ 。広葉樹枯木または生木上に重なって発生する。熱帯地域に広く分布するが、国内での発生は稀で、南関東以南の暖温帯~亜熱帯地域数か所から知られている。暖温帯林の伐採、開発により生育地が著しく減少している。

【参考文献】 76)

執筆者：服部 力（森林総合研究所）

ヒダナシタケ目 タバコウロコタケ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## メシマコブ *Phellinus linteus* (Berk. & M.A. Curtis) Teng

子実体は無柄、多年生。傘は半円形~不定形、幅5~20cm。傘表面は暗褐色~黒色、はじめビロード状、のちひび割れて粗面になる。傘肉は黄褐色、木質で硬い。子実層托は管孔状、孔口面ははじめ黄色、のち黄褐色~褐色。担子胞子は短橢円形、淡黄色~淡黄褐色、4.5~6×4~5  $\mu\text{m}$ 。東アジア、中南米などに分布。国内では暖温帯を中心にクワの老木上に発生する。近年健康食品として注目されている。クワの老木の減少や乱獲の影響により、発生量が著しく減少している。

【参考文献】 23)

執筆者：服部 力（森林総合研究所）

ケシボウズタケ目 ケシボウズタケ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## ウロコケシボウズタケ *Tulostoma squamosum* Pers.

子実体は幼時地中生で球形、成熟すると柄部が伸長し、頭部と柄が地表にでる。頭部は径 10~15mm、柄は 50~100×3~6mm、殻皮は 2 層、外皮は暗褐色の膜質で断片的に残り、内皮は黄褐色で平滑。孔口は小さく筒状で顯著に突出する。柄は暗褐色~明褐色で鱗状にささくれる。石灰岩地を好む。北米、欧洲に分布し、日本では本州（栃木、京都）、四国（高知）の石灰岩地数か所のみから知られている。既存の生息地の一部は開発による悪影響を受けており、現在知られている発生地の環境が開発などにより失われれば消滅する可能性が高い。

【参考文献】 24)、90)、91)

執筆者：浅井郁夫／吹春俊光（千葉県立中央博物館）

スッポンタケ目 スッポンタケ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## アカダマノオオタイマツ *Phallus rubicundus* (Bosc) Fr.

菌蕾は卵形~長楕円形、白色、空気に触れると赤色に変色する。托は伸長すると高さ 15~28cm、濃赤色~淡い赤色、基部はクリーム色。傘は釣鐘形、高さ 3~4.5cm、頂部は尖るかやや截断状、托上部とほぼ同色。グレバには強い刺激臭がある。海浜生植物が繁茂する砂浜海岸に、夏~秋に単生~散生する。北米、アフリカ、オセアニア、パキスタン、中国等に分布し、日本では静岡、富山などのごく限られた地域の砂浜海岸に局在している。生育依存環境である自然で良好な海浜砂地の減少や環境の悪化に伴い、発生が減少している。

【参考文献】 30)

執筆者：吹春俊光（千葉県立中央博物館）／糟谷大河（筑波大学）

スッポンタケ目 スッポンタケ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## コナガエノアカカゴタケ *Simblum sphaerocephalum* Schleld.

菌蕾は球形~卵形、白色。成熟すると托を伸ばし高さ 5~10cm、ピンク色~橙色。托の上部にはピンク色~橙色で網目をもつカゴ状で球形の頭部をもつ。グレバは粘液状で頭部に形成され、オリーブ色~褐色、強い刺激臭を発する。初夏~冬に、海浜生植物が繁茂する砂浜海岸の、コウボウムギが生育するゾーンよりも海側に、単生~散生する。汎世界的に分布し、日本では茨城、千葉、静岡、愛知のごく限られた地域の砂浜海岸にのみ、稀に発生する。生育依存環境である自然で良好な海浜砂地の減少や環境の悪化に伴い、発生が減少している。

【参考文献】 6)、7)

執筆者：吹春俊光（千葉県立中央博物館）／糟谷大河（筑波大学）

ビョウタケ目 ビョウタケ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## クロムラサキハナビラタケ *Ionomidotis irregularis* (Schwein.) E.J. Durand

子囊盤は耳房状から花びら状、不規則に波打ち、20~50×10~30mm 程度。群生あるいは単生、短い柄をもち、柄は共通の基部より出る。水酸化カリウムにて強い ionomidotic 反応あり。子実層は暗紫色からほぼ黒色。子囊は棍棒形、メルツァー試薬で先端は染色されず、60~70×5.7~6.5μm。子囊胞子は楕円形、2 個の油球を有し、7~10×3.5~4μm。側糸は糸状、先鋒で厚壁、基部で幅 1.5μm、最大幅 2~4μm。稀にしか採集されず、冷温帶老齢渓畔林の材上に分布が局在しているため、森林伐採により絶滅するおそれがある。日本（青森、茨城、鳥取）、オーストリア、ポーランド、ロシア、北米に分布。

【参考文献】 93)

執筆者：細矢 剛（国立科学博物館）

肉座菌目 麦角菌科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ヤエヤマコメツキムシタケ *Cordyceps elateridicola* Kobayasi & Shimizu

子実体は地中の鞘翅目のコメツキムシ科の幼虫に生じ、高さ 2.5~4cm。柄は径 1.7~2mm、淡桃灰色、ややしまった肉質。柄の上方途中に淡桃白色、長さ 4.5~9mm、径 1.7~2mm、円筒状の稔果部を形成する。子囊殻は稔果部に埋生し、400~450×120~150μm。子囊は太さ 3μm、先端の肥厚部分は径 3μm。子囊胞子 (2 次胞子) は矩形、3~4×1μm。発生地は日本及び台湾。日本国内では西表島、石垣島、奄美大島の照葉樹林に限定され、発生地のいくつかは開発等により環境が劣化しつつある。

【参考文献】 40)、61)、88)、89)

執筆者：内山 茂 (日本冬虫夏草の会)

肉座菌目 麦角菌科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ウスアカシャクトリムシタケ *Cordyceps rosea* Kobayasi & Shimizu

日本固有種。子実体はガの幼虫の頭部から単生し、棍棒状、高さ 11~16mm、径 1~4mm、上部は淡紅色、基部は桃白色。子囊殻は子実体の上部に埋生し、細ロビン形、330~380×160~230μm、長さ 7mm、径 2~4mm の稔果部を形成する。子囊は 100×3~4μm、先端の肥厚部分は径 2~5μm。子囊胞子は 120×1~1.5μm、隔壁数は 8~10、2 次胞子に分割しない。1959 年に山形県米沢市のブナ林で採集、新種記載された後、北海道士幌町、足寄町、長野県など国内数か所で採集されているが、発生地は局在的で、開発等により環境が劣化しつつある。

【参考文献】 40)、53)、88)、89)

執筆者：内山 茂 (日本冬虫夏草の会)

ハラタケ目 キシメジ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## シイノトモシビタケ *Mycena lux-coeli* Corner

日本固有種。傘は径 15~25mm、円錐形、表面は微粉で被われ、淡紫褐色。柄は 20~45×1~1.5mm、中空、微粉で被われ、白色、基部には絨毛がある。ひだは直生でやや疎、白色で縁は紫褐色。担子胞子は広楕円形、8.5~12×6.5~9μm、無色、平滑、非アミロイド。ひだは青白く強く光る。柄の光は見落とすくらい弱い。シイ樹皮および腐朽材に発生し、八丈島に産する。紀伊半島、九州からも報告があるが、実際には本種ではないと思われる。本種の生育するシイの古木のある照葉樹林が減少すれば「絶滅危惧」に移行する可能性がある。

【参考文献】 4)、9)

執筆者：根田 仁 (森林総合研究所)

ハラタケ目 キシメジ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ニセマツタケ *Tricholoma fulvocastaneum* Hongo

子実体はキシメジ型。傘は径 6~10cm、帯黄土褐色~くり褐色、表面は繊維状で大小の鱗片を生じる。肉は白色で軟らかく、においはほとんどない。ひだは湾生し、白色、密。柄は下部で細まり、中実、繊維状膜質のつばをもち、つばより下は傘と同様の褐色鱗片に被われる。胞子紋は白色。担子胞子は広楕円形、無色、平滑、6~7×4.4~5.2μm。日本 (本州・四国・九州)、タイに分布。コナラ・シイなどのブナ科広葉樹林に依存する菌根菌であり、発生が比較的稀である。開発等により生育環境が悪化している。

【参考文献】 22)

執筆者：工藤伸一 (甲葦塾菌葦研究会)

ハラタケ目 キシメジ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## マツタケ *Tricholoma matsutake* (S. Ito & S. Imai) Singer

子実体はキシメジ型。傘は径 8~20 (30) cm、淡黄褐色~くり褐色の纖維状鱗片に被われる。肉は白色、ち密、特有の香氣がある。ひだは湾生、白色、密。柄はほぼ上下同幅または下方で多少太まり、中実。纖維状膜質のつばをもち、つばより上は白色粉状、下部は傘と同様の褐色纖維状鱗片に被われる。胞子紋は白色。担子胞子は広楕円形、無色、平滑、 $6.5 \sim 7.5 \times 4.5 \sim 5.5 \mu\text{m}$ 。日本を含む東アジアおよび北ヨーロッパに分布。マツなどの針葉樹に依存する菌根菌。松枯れや林の手入れ不足等から生育環境の多くが悪化、近年特に発生量が減少している。

【参考文献】 22)

執筆者：工藤伸一（甲葦塾菌草研究会）

ハラタケ目 キシメジ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## シロマツタケモドキ *Tricholoma radicans* Hongo

日本固有種。子実体はキシメジ型。傘は径 3~4cm、ほぼ白色。表面はひび割れ鱗片状。肉は白色、ときに松脂臭がある。ひだは直生~多少垂生、白色、やや疎。柄は白色、ときに基部で淡黄土色、中実。基部は急に細くなって下端がとがる。纖維状膜質のつばをもち、つばより下はさくられ状の顯著な鱗片に被われる。胞子紋は白色。担子胞子は広楕円形、無色、平滑、 $5.5 \sim 6.5 \times 3.5 \sim 4 \mu\text{m}$ 。本州、四国、九州に分布。マツ老齢林などに発生。主にマツ林に依存する菌根菌と考えられ、松枯れや開発によるマツ林の減少から、生存が脅かされている。

【参考文献】 12)

執筆者：工藤伸一（甲葦塾菌草研究会）

ハラタケ目 キシメジ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## マツタケモドキ *Tricholoma robustum* (Alb. & Schwein.) Ricken

子実体はキシメジ型。傘は径 4~10cm、赤褐色、表面は小さいさくられ状の鱗片で被われる。肉は白色、古くなると褐色、臭いは温和、煮ると黒ずむ。ひだは湾生、白色、密。柄は基部で急に細くなつて下端がとがり、中実。纖維状膜質のつばをもち、つばより上は白色粉状、下部は傘と同様の赤褐色纖維状鱗片に被われる。胞子紋は白色。担子胞子は広楕円形、無色、平滑、 $6 \sim 7 \times 3.5 \sim 4 \mu\text{m}$ 。日本ほか北半球温帯以北に分布。アカマツやクロマツなどのマツ林に依存する菌根菌である。松枯れや開発によるマツ林の減少から、生存が脅かされている。

【参考文献】 22)

執筆者：工藤伸一（甲葦塾菌草研究会）

ヒダナシタケ目 サンゴハリタケ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## フサハリタケ *Creolophus cirrhatus* (Pers.) P. Karst.

子実体は無柄。傘は幅 4~10cm、貝殻形、通常数個が基部で癒着して重なり合う。全体白色~クリーム色。傘の表面は短い針状突起で被われる。子実層托は針状、針は比較的長い。肉は白色で厚く、質は軟らかい。傘および子実層托の実質は一菌糸型。担子胞子は広楕円形、無色、平滑、アミロイド、 $3.2 \sim 4 \times 2.4 \sim 3.2 \mu\text{m}$ 。子実層にはグレオシスチジアがある。日本（青森、新潟、栃木、埼玉、大分）、北ヨーロッパ、アメリカ西部に分布。冷温帶老齢渓畔林の倒木上に発生。分布は局在的で発生は稀である。開発や温暖化等により生育環境が悪化している。

【参考文献】 65)、72)

執筆者：工藤伸一（甲葦塾菌草研究会）

ヒダナシタケ目 サルノコシカケ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## チョレイマイタケ *Dendropolyporus umbellatus* (Pers.) Jülich

子実体は有柄、柄は分岐し先端に傘をつける。傘は円形、径1~4cm。傘表面は類白色~淡褐色、平滑~ややささくれる。傘肉は類白色、柔軟な肉質。子実層托は浅い管孔状、孔口面は類白色。担子胞子は円筒形、7~10×3~4μm。北半球の冷涼な地域に分布。広葉樹林内に形成された菌核上、ときに倒木上に発生するが稀。食用、薬用として採取され、減少している。採取の際、菌核ごと持ち去られることが多く、今後乱獲が進むと「絶滅危惧」に移行する可能性がある。

【参考文献】 23)

執筆者：服部 力 (森林総合研究所)

---

ツチダンゴ目 ツチダンゴ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## コウボウフデ *Pseudotulostoma japonicum* (Kawam.) I. Asai, H. Sato & Nara

日本固有種。幼若時は基部に根性の菌糸束を有する卵状。成熟に伴い、中央部より柄が伸張し、成熟するとその頭部が膨大しフデ状となる。高さ 60~160mm。子嚢は若い子実体においてのみ観察され、薄膜で球形、直径は 22~30μm、8胞子性。子嚢胞子は球形で無色、成熟に伴い、さび褐色。本菌は、長い間担子菌と考えられてきたが、最近子嚢菌であることが判明した。本菌の採集機会は希であるが、生息地は比較的管理された二次林を中心に生息するため、森林伐採により減少するおそれがある。

【参考文献】 2)、67)、87)

執筆者：細矢 剛 (国立科学博物館)

---

チャワンタケ目 ベニチャワンタケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ヒュウガサラタケ *Phillipsia dochmiae* (Berk. & M.A. Curtis) Seaver

腐朽木上に発生する。子嚢盤は皿形、皮質、直径 9~13mm、白色、短い柄をもつ。子嚢は棍棒状で先端はメルツァー試薬にて染色されない。8胞子性、子嚢胞子は無色で、表面には 4~6 本の縦縞、楕円形からレモン形、1~2 個の油球 (1 胞子あたり) を含み、22.5~27.5×10~15μm、側糸はほぼ糸状、先端部は複数に分岐する。日本 (九州)、北米に分布。本邦では、1999 年に九州の暖温帯林から初めて採集された。

【参考文献】 70)

執筆者：細矢 剛 (国立科学博物館)

---

チャワンタケ目 アミガサタケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## オオズキンカブリ *Ptychoverpa bohemica* (Krombh.) Boud.

子実体は孤生あるいは群生、高さはときに 20cm に及ぶ。頭部は鐘状、平行な縦しわをもち、淡黄~淡褐色。柄は円筒形、太さ 1~3cm、しばしば基部がわざかに太い。子嚢は円筒形あるいは類円筒形、通常 2 個、稀に 4 個の子嚢胞子を生ずる。子嚢胞子は長楕円形あるいはボート形、平滑、ほとんど無色あるいは黄色をおび、54~80×12.5~18 mm。側糸は糸状、先端は肥大して類棍棒形。春に草地並びに林内地上に生じる。本種の希少性は高いが、存続を脅かす要因は不明である。日本、北アメリカ、ヨーロッパに分布。

【参考文献】 23)

執筆者：細矢 �剛 (国立科学博物館)

チャワンタケ目 アミガサタケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## トガリフカアミガサタケ *Morchella patula* var. *semilibera* (DC.) S. Imai

頭部は円錐形、頂端は尖り、下縁部は頭部の中央付近まで茎から離れ、高さ 4~10cm、ときに 15 cm。肋脈は横よりも縦によく発達し、深さも比較的浅い。子実層はオリーブ黄~オリーブ褐色。柄は円筒形、ほぼ同幅、基部はやや膨大、白色あるいは黄土色で粉状。子嚢は円筒形。子嚢胞子は橢円形、平滑、無色あるいは黄色味、19~23×12~14mm。側糸は糸状、先端は球状にふくれる。春に草地および林内地上に生じる。希少性が高いが、存続を脅かす要因は不明。日本 (北海道・本州)、北アメリカ、ヨーロッパ、オーストラリアに分布。

【参考文献】 23)

執筆者：細矢 剛 (国立科学博物館)

チャワンタケ目 ピロネマキン科

DD (情報不足) [新規掲載]

## アカハナビラタケ *Ascosparsassis shimizuensis* Kobayasi

子嚢盤は束生し、不規則に波打ち、花びら状、20~30mm 程度。堅い肉質~革質で伸縮性があるが、ゼラチン状であることはなく、淡紅色。托は円形菌組織。側糸は糸状、先端がカギ形に湾曲する。子嚢は円筒形、先端はメルツァー試薬により染色されない。子嚢胞子は橢円形、無色、2 個の油球を含み、5.5~6.5×3.5~4μm。本種は希少性が高く、生育環境などについても一定していない可能性があり、存続を脅かす要因は不明である。日本 (山形、宮城、多摩)、インドネシアに分布。

【参考文献】 34)、63)、68)

執筆者：細矢 剛 (国立科学博物館)

肉座菌目 麦角菌科

DD (情報不足) [新規掲載]

## キイロクビオレタケ *Cordyceps asyuenensis* Kobayasi & Shimizu

子実体は朽木中の甲虫の幼虫に生じ、長さ 8~17mm。柄は淡黄色から淡クリーム色、径 0.5~1mm、上方に 1~4×2~2.8mm、淡黄褐色、円盤状の穂果部を背着しその部分で折れ曲がる。子嚢殼は穂果部に裸生し、卵形、600~650×450μm。子嚢胞子 (2 次胞子) は矩形、7~8×1.5μm。1963 年に京都府芦生で採集、新種記載され、その後山形県内から採集されている。希少性が高く分布も局在しているが、存続を脅かす要因が不明である。日本、ヨーロッパに分布。

【参考文献】 40)、48)、88)、89)

執筆者：内山 茂 (日本冬虫夏草の会)

肉座菌目 麦角菌科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ウスイロヒメフトバリタケ *Cordyceps carabidicola* Kobayasi & Shimizu

日本固有種。子実体は地中の甲虫 (オサムシ科) の幼虫に生じ、地上部は高さ 10~13mm、太針状。柄は円柱状、径 1~1.2mm、淡クリーム白色、堅い肉質。柄の上方に淡桃白色、卵形の子嚢殼がかたまって裸生する。子嚢殼は 400~500×300μm、子嚢は 380~470×5~6μm、先端の肥厚部分は径 4~5μm。子嚢胞子 (2 次胞子) は矩形、4×1μm。1959 年に山形県内で採集され新種記載された。希少性が高く分布も局在しているが、存続を脅かす要因が不明である。

【参考文献】 40)、47)、50)、88)、89)

執筆者：内山 茂 (日本冬虫夏草の会)

肉座菌目 麦角菌科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ヒメタンポタケ *Cordyceps delicatostipitata* Kobayasi

日本固有種。子実体は黒色小型のツチダンゴ(地下生子囊菌 *Elaphomyces*)に生じる。地上部は高さ 2.3~4.5cm。柄は細い円柱形、径 0.5~1mm、淡黄灰色、先端に球形から卵形、2~3.5×2~2.5mm、淡黄褐色からオリーブ色の稔果部を形成する。子囊殻は稔果部に埋生し卵形、480~540×225~255μm。子囊は 320~460×10~13μm、先端の肥厚部分は径 8μm。子囊胞子(2次胞子)は矩形、18~28×3~5μm。1958 年に山形県、福島県などで採集されている。希少性が高く分布も局在しているが、存続を脅かす要因が不明である。

【参考文献】 35)、40)、88)、89)

執筆者：内山 茂 (日本冬虫夏草の会)

肉座菌目 麦角菌

DD (情報不足) [新規掲載]

## ケラタケ *Cordyceps koreana* Kobayasi

子実体はケラの成虫または幼虫の胸部と腹部から生じ、地上部は円柱状、高さ 3.5~8cm、径 1.8~2mm、淡灰色から淡黄灰色でやや堅い纖維質。子囊殻は子実体の中間部分に裸生か半裸生し、卵形、淡褐色、210~255×130~140μm。子囊は 50~70×7~9μm。子囊胞子は 40~63×2~2.5μm、隔壁数は 7~8、2次胞子に分割しない。日本、台湾、朝鮮半島、北米に分布。日本国内からは 1955 年に宮崎県日南市で採集され、その後、熊本県で採集された。希少性が高く分布も局在しているが、存続を脅かす要因が不明である。

【参考文献】 38)、40)、88)、89)

執筆者：内山 茂 (日本冬虫夏草の会)

肉座菌目 麦角菌科

DD (情報不足) [新規掲載]

## クサンギヒメタンポタケ *Cordyceps kusanagiensis* Kobayasi & Shimizu

日本固有種。子実体は地中のガの蛹(繭)に生じ、地上部は高さ 7~15mm。柄は淡黄色、円柱状、径約 1mm、上端に、3~4×2~3mm の白色頭状の稔果部を形成する。子囊殻は卵形、600~675×350~400μm、稔果部に斜埋生し、橙黄色の孔口が裸出する。子囊胞子(2次胞子)は矩形、3~5×1.5μm。1981 年に山形県戸沢村で採集され新種記載されたが、その後の採集記録はない。希少性が高く分布も局在しているが、存続を脅かす要因が不明である。

【参考文献】 40)、62)、88)、89)

執筆者：内山 茂 (日本冬虫夏草の会)

肉座菌目 麦角菌科

DD (情報不足) [新規掲載]

## コゴメセミタケ *Cordyceps minuta* Kobayasi

日本固有種。子実体は地上に転がったミンミンゼミの成虫の背面、覆面などに生じ、淡黄白色。長さ 2~3mm、径 0.3~0.5mm の極小サイズの柄の先端に 1.2~1.5×1~2mm の卵形から類球形の小さな稔果部を形成する。子囊殻は稔果部にやや斜めに半埋生し、卵形、340~400×230~190μm。子囊は 120~150×3~5μm、先端の肥厚部分は径 3μm。子囊胞子(2次胞子)は矩形、4~6×1μm。1956 年に埼玉県秩父両神山中で採集、新種記載されたがその後の採集記録はない。希少性は高いが、発見が困難なこともあり、存続を脅かす要因が不明である。

【参考文献】 40)、41)、88)、89)

執筆者：内山 茂 (日本冬虫夏草の会)

肉座菌目 麦角菌科

DD (情報不足) [新規掲載]

## オグラムシタケ *Cordyceps olivacea* Rick

子実体は地中の甲虫の幼虫に生じ、地上部は高さ約 2.5cm。子実体の上端に円筒状から長楕円形、長さ 8mm、径 4mm の暗オリーブ色の稔果部を形成する。柄は円柱状、径約 2mm、上方はオリーブ色、下方は淡色となる。子囊殻は卵形、500～530×340～360μm、稔果部に斜めに半埋生する。子囊は径 6～7.5μm。子囊胞子 (2 次胞子) は矩形、3.5～5×1～1.5μm。日本及びブラジルに分布。1950 年に長野県南佐久郡北相木村の御座山で採集されたがその後の採集記録はない。希少性が高く分布も局在しているが、存続を脅かす要因が不明である。

【参考文献】 40)、44)、88)、89)

執筆者：内山 茂（日本冬虫夏草の会）

肉座菌目 麦角菌科

DD (情報不足) [新規掲載]

## トワダミドリクチキムシタケ *Cordyceps pseudoatrovirens* Kobayasi & Shimizu

日本固有種。子実体は朽木中の甲虫 (ゴミムシダマシ科) の幼虫に生じ、朽木上の高さ 1.5～2.5cm。子実体の上端に円錐形、8～11×4～7mm の淡青緑色の稔果部を形成する。柄はゆがんだ円柱状、径 1～3mm、淡黄緑色。子囊殻は卵形、520～550×250～320μm、稔果部に埋生する。子囊は太さ 4～5μm、先端の肥厚部分は径 3μm。子囊胞子は長紡錘形、50×2.5μm、隔壁数は 8、2 次胞子に分割しない。1979 年に青森県奥入瀬で採集、新種記載された。希少性が高く分布も局在しているが、存続を脅かす要因が不明である。

【参考文献】 40)、52)、88)、89)

執筆者：内山 茂（日本冬虫夏草の会）

肉座菌目 麦角菌科

DD (情報不足) [新規掲載]

## キビノムシタケモドキ *Shimizuomyces kibianus* Kobayasi & Shimizu

日本固有種。子実体はヤマカシュウまたはサルトリイバラの果実に生じ、高さ約 2cm。柄は円柱状、径約 1mm、淡灰色。子実体上端に暗灰色から淡灰色、2.5×2mm の卵形の稔果部を形成する。子囊殻は稔果部に埋生し卵形。子囊は径 6μm。子囊胞子は 4～5 個の隔壁があり、2 次胞子に分割しない。Kobayasi は、本種を 1983 年に和歌山県高野山での採集品について *Shimizuomyces* 属の第 2 番目の新種として記載しているが、採集場所は山形県鶴岡市内の誤りと思われる。その後の採集記録はないが、存続を脅かす要因が不明である。

【参考文献】 39)、88)、89)

執筆者：内山 茂（日本冬虫夏草の会）

肉座菌目 麦角菌科

DD (情報不足) [新規掲載]

## オガサワラクモタケ *Torrubiella albolanata* Petch

クモの体表を白色綿毛質の菌糸層 (スベリクル) が覆い、その上に淡橙黄色、円錐形の子囊殻が裸生する。子囊殻は先端の孔口部分が暗紅色、400～520×175～200μm。子囊は径 2～4μm、先端の肥厚部分は径 2～3μm。子囊胞子 (2 次胞子) は矩形、3～4×1～1.5μm。日本とイギリスに分布。日本では 1974 年に小笠原母島の石門山中でワダンノキの葉上に発生したものが採集され、その後の採集記録はない。小笠原での調査が不十分なこともあります、存続を脅かす要因は不明である。

【参考文献】 40)、57)、84)、88)、89)

執筆者：内山 茂（日本冬虫夏草の会）

肉座菌目 麦角菌科

DD (情報不足) [新規掲載]

## シロトガリクモタケ *Torrubiella farinacea* Kobayasi & Shimizu

日本固有種。小型のクモの体表を白色綿毛質の菌糸層（スビクル）が覆い、その上に白色、円錐形の子囊殻が裸生する。子囊殻は先端の孔口部分を除いて白色の菌糸膜が覆い、 $620\sim730\times270\sim300\mu\text{m}$ 。子囊は径 $3\mu\text{m}$ 、先端の肥厚部分は径 $3\mu\text{m}$ 。子囊胞子（2次胞子）は矩形、 $3\sim4\times1\mu\text{m}$ 。1958年に福島県稻子の朽木上で採集され新種記載されたがその後の採集記録はない。希少性が高く分布も局在しているが、存続を脅かす要因が不明である。

【参考文献】 40)、56)、88)、89)

執筆者：内山 茂（日本冬虫夏草の会）

ハラタケ目 ヒラタケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ツバヒラタケ *Pleurotus dryinus* (Pers.) P. Kumm.

傘は径 $50\sim150\text{mm}$ 、半円形から類円形、表面は白色から褐色で絨毛状または鱗片に被われる。ひだは垂生で分岐し、類白色から黄色。被膜が幼時ひだを被い、後に傘の縁に着くかつばとして残る。柄は偏心生あるいは側生、 $15\sim120\times5\sim30\text{ mm}$ 、白色または黄色を帶び、細かい密軟毛に被われる。担子胞子は円筒形、 $6.5\sim17\times3\sim5\mu\text{m}$ 、無色、平滑。腐朽材上に発生し、温帯に広く分布するが、日本では採集例が少ない。希少性が高いが、存続を脅かす要因が不明である。

【参考文献】 21)、26)

執筆者：根田 仁（森林総合研究所）

ハラタケ目 ヌメリガサ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## クロゲキヤマタケ *Hygrocybe hahashimensis* (Hongo) Hongo

日本固有種。傘は径 $50\text{mm}$ 前後、丸山形から扁平になり、中央はやや突出する、黄色から橙黄色で、暗褐色の繊維状の鱗片に被われる。ひだは狭生、疎、厚く、あるいは淡黄色。柄は $45\sim50\times\pm8\text{mm}$ 、繊維状、黄色。担子胞子は橢円形、 $7\sim9.5\times4.5\sim6.5\mu\text{m}$ 、無色、平滑、非アミロイド。ひだの実質の菌糸は整型。湿った林内の地上に発生する。1977年に小笠原母島桑の木山で採集され新種記載された以後、採集例がない。原生度の高い1か所から記録されている。今後周辺地域での生育状況を調査する必要がある。

【参考文献】 13)、15)、75)

執筆者：根田 仁（森林総合研究所）

ハラタケ目 ヌメリガサ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ネッタイアカヌメリガサ *Hygrocybe hypohaemacta* var. *boninensis* (Hongo) Hongo

日本固有種。傘は $18\sim45\text{mm}$ 、丸山形から扁平になり、ときどき中央がくぼむ、表面は平滑、ヌメリがあり、赤色から橙色。ひだは直生または狭生あるいは離生。赤色から橙色、縁は淡色。柄は $20\sim40\times30\sim60\text{mm}$ 、ヌメリがあり、傘と同色か淡色。担子胞子は卵形から長橢円形、 $8.5\sim12\times6.5\sim9.5\mu\text{m}$ と $5.5\sim7.5\times3.5\sim5\mu\text{m}$ の2型がある。林内の地上に発生する。1977年に小笠原母島桑の木山で採集され新種記載された以後、採集例がない。原生度の高い1か所から記録されている。今後周辺地域での生育状況を調査する必要がある。

【参考文献】 15)、27)、75)

執筆者：根田 仁（森林総合研究所）

ハラタケ目 キシメジ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ナガエノヤグラタケ

*Asterophora parasitica* (Bull. ex Pers.) Singer

子実体はモリノカレバタケ型。傘は径 2~3cm、淡灰褐色~灰白色、絹状光沢があり、放射状に走る纖維で被われる。ひだは直生、疎、灰褐色。柄は細長く、傘と同色で同じように纖維状。ひだ部に紡錘状、平滑な厚膜胞子をつくる。日本（青森、埼玉、山梨、愛媛、熊本）、ヨーロッパ、北アメリカ、北アフリカで確認されている。シロハツ、ケシロハツなどのベニタケ科の古い子実体上に発生。ベニタケ科の子実体に依存する寄生菌であり、希少性が高い。分布の実態等については不明であり、引き続き調査が必要である。

【参考文献】 22)

執筆者：工藤伸一（甲葦塾菌蕈研究会）

ハラタケ目 キシメジ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ハチマキイヌシメジ

*Clitocybe vittatipes* S. Ito & S. Imai

日本固有種。落葉層から発生する。傘は径 40~50mm、じょうご形、暗淡黄褐色またはオリーブ灰色で、無毛または濃色の纖維の筋がある。ひだは垂生し、類白色、柄に接する部分はオリーブ褐色。柄は 40×5mm、同幅、中空、傘と同色、基部には白い綿毛がある。担子胞子は球形、径 4~5μm、無色、平滑、非アミロイド。1936 年と 1976 年に小笠原母島で採集され、神奈川県からも報告がある。希少性が高く分布も局在しているが、存続を脅かす要因が不明である。

【参考文献】 14)、27)、75)

執筆者：根田 仁（森林総合研究所）

ハラタケ目 キシメジ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## シロタモギタケ

*Hypsizygus ulmarius* (Bull.) Redhead

傘は、径 50~150mm、円形または不正形、丸山形から扁平、白色から褐色、表面は平滑または軟毛がある。ひだは狹生または湾生、密またはやや疎、白色から淡黄土色。柄は偏心生で屈曲し、30~120×10~40mm、傘面とほぼ同色、中実、基部には絨毛がある。胞子紋は白色。担子胞子は球形、径 4~6μm、無色、平滑。ニレなどの腐朽材上に発生し、温帯に広く分布するが、日本では採集例が少ない。希少性が高いが、存続を脅かす要因が不明である。

【参考文献】 21)、31)

執筆者：根田 仁（森林総合研究所）

ハラタケ目 キシメジ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## シモコシ

*Tricholoma auratum* (Paulet) Gillet

子実体はキシメジ型。全体がほぼ硫黃色~黄色を帯びる。傘は径 5~10cm、湿っているとき粘性があり、しばしば中央部で淡赤褐色を帯び、灰褐色の小鱗片を生じる。肉はち密、ほぼ白色。味は温和で、苦味や辛味はない。ひだは湾生し、密。柄は幼時基部でそろばん玉状に膨らむが、のちにほぼ上下同幅となる。表面は纖維状。胞子紋は白色。担子胞子は広楕円形、無色、平滑、6.5~8×4.5~5μm。日本ほか北半球一帯に分布。海岸などのマツ林内に発生。マツ林に依存する菌根菌で、発生の減少傾向が見られるが、引き続き調査が必要である。

【参考文献】 22)

執筆者：工藤伸一（甲葦塾菌蕈研究会）

ハラタケ目 テングタケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ムニンヌメリカラカサタケ *Limacella olivaceobrunnea* Hongo

日本固有種。傘は径 50~60mm、丸山形から後に中高に浅くくぼむ、ヌメリがあり、オリーブ褐色、中央は濃色、褐色の細かい鱗片で被われる、ひだは離生、白色、密からやや疎。柄は  $\pm 70 \times 8 \sim 15$  mm、ヌメリがあり、傘より淡色、先端は白色、中実。つばは消失しやすい。担子胞子は広楕円形または亜球形、6.5~7.5  $\times$  5.5~7  $\mu\text{m}$ 、細点状。湿った林内の地上に発生する。1977 年に小笠原母島庚申塚で採集され新種記載された以後、採集例がない。原生度の高い 1 か所から記録されている。今後、周辺地域での生育状況を調査する必要がある。

【参考文献】 13)、75)

執筆者：根田 仁（森林総合研究所）

ハラタケ目 テングタケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## コササクレシロオニタケ *Amanita squarrosa* Nagas. & Hongo

日本固有種。子実体はウラベニガサ型。全体が白色。傘は径 3~6cm、やや粘性があり、表面に綿質な破片状～イボ状の付着物をもつが、それらは比較的脱落しやすい。縁はしばしばつばの残片を付ける。ひだはほぼ離生、密。柄は基部が紡錘状に膨らみ、中実。頂部付近に綿質あるいは多少粉状のつばがあり、下半部にさかむけ状の顯著なさざれを輪状に付ける。胞子紋は白色。担子胞子は類球形、アミロイド、8~10  $\times$  7~9  $\mu\text{m}$ 。青森、滋賀、鳥取に分布。ナラ類の混じったアカマツ林に発生。希少性が高いが、分布や生態に不明な点が多く、引き続き調査が必要である。

【参考文献】 71)

執筆者：工藤伸一（甲葦塾菌葦研究会）

ハラタケ目 ウラベニガサ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## キヌオオフクロタケ *Volvariella bombycina* (Schaeff.) Singer

子実体はウラベニガサ型。傘は径 8~20cm、淡クリーム白色、微細な絹毛状の小鱗片で密に被われ、粘性はない。縁部はしばしばひだの端から多少突出する。肉は白色。ひだは柄に離生、密、白色のち肉色。柄はほぼ白色、中実。根もとは多少膨らみ、基部に大きな膜質、袋状のつぼをそなえる。胞子紋はピンク色。担子胞子は卵形～楕円形、平滑、6.5~8  $\times$  4.5~6  $\mu\text{m}$ 。縁および側シスチジアはしばしば頂部に突起をそなえる。汎世界的に分布。広葉樹の枯幹上に発生。発生が稀であり、分布や生態について引き続き調査が必要である。

【参考文献】 22)

執筆者：工藤伸一（甲葦塾菌葦研究会）

ハラタケ目 イッポンシメジ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ワカクサウラベニタケ *Entoloma incanum* (Fr.) Hesler

子実体の傘は径 1~4.5cm、円錐形からほぼ平らに開く。傘表面はオリーブ緑色～オリーブ褐色～黄緑色～黄色。ひだは疎、白色～やや緑色を帶び、のちピンク色となる。柄は 2~7cm、傘とほぼ同色で、手で触れると速やかに青緑色にかわる。肉には不快臭があり、傷をつけると青変する。牧草地や山林内の路傍に見られる。北米、南米南部、欧州、パキスタン、ニュージーランド等に分布。日本では西日本の雑木林などで見つかっている。希少性が高いが、減少要因や分布の実態が不明であり、引き続き調査が必要である。

【参考文献】 11)、16)

執筆者：吹春俊光（千葉県立中央博物館）

ハラタケ目 イグチ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## アキノアシナガイグチ

*Boletellus longicollis* (Ces.) Pegler & T.W.K. Young

子実体の傘径は2.5~5cm、茶褐色。柄長は15~30cm、淡褐色、傘や柄の表面は著しい粘質物に被われ、粘性で膜質の内被膜がある。肉の変色性はない。シンガポール、北ボルネオ等から知られていたが、日本では沖縄本島で1967年に最初に報告され、のち八重山諸島、九州（屋久島、奄美、佐賀）、本州（山口県、広島県、長野県）の分布も確認された。東アジア暖温帯の常緑のシイ・カシ老齢林に強く依存する外生菌根菌。希少性が高く各地の分布も局在しているが、分布の実態が不明であり、引き続き調査が必要である。

【参考文献】 5)、17)、75)

執筆者：吹春俊光（千葉県立中央博物館）

ハラタケ目 イグチ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ヤマドリタケ

*Boletus edulis* Bull.

子実体の傘表面は平滑で粘性があり径は5~20cm、褐色から淡褐色、柄の長さ10~20cm、上半部には網目模様がある。管孔は最初白色の菌糸で被われ、のち淡黄色から帯オリーブ緑色。トウヒ属、モミ属などの針葉樹林に発生する外生菌根菌で、日本ではヤマドリタケモドキと混同されてきたが、後者はブナ科樹林に発生し、柄全体に網目をもち、幼時傘表面に短細毛をもつ点で異なる。北半球に分布し、日本では本州中部以北の亜高山帯から北海道の針葉樹林に見られる。希少性は高いが、減少要因は不明で、引き続き調査が必要である。

【参考文献】 23)

執筆者：吹春俊光（千葉県立中央博物館）

ハラタケ目 イグチ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## トライグチ

*Strobilomyces mirandus* Corner

子実体の傘は径は3~6cm、柄は4~7cm、傘と柄は鮮黄色~黄褐色の綿毛状の小鱗片で被われる。柄の上部に網目模様があり、傘縁には脱落性の被膜の名残が見られる。管孔は灰白色、傷をつけると赤変、のち黒変する。マレー半島ジョホール産の標本をもとに記載され、日本では宮崎県延岡市のイチイガシ・スダジイ・ウラジロガシ林で2002年に採集されたものが新産として報告された。暖温帯のシイ・カシ老齢林に強く依存する外生菌根菌と思われるが、近年になって記録された種で分布の実態が不明であり、引き続き調査が必要である。

【参考文献】 5)、86)

執筆者：吹春俊光（千葉県立中央博物館）

ヒダナシタケ目 コウヤクタケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ヘゴノコウヤクタケ

*Leptocorticium cyattheae* (S. Ito & S. Imai) Hjortstam & Ryvarden

日本固有種。子実体は背生、薄く基質に広くひろがる。子実層面は平滑、灰白色~黄白色。菌糸型は一菌糸型。子実層には樹枝状菌糸体および細長いシスチジアを有する。担子胞子は短円筒形~ボート形（ややS字型に曲がる）、無色、8~12×4.5~5.5μm。小笠原諸島のヘゴ葉柄上に発生。1940年に新種記載されて以降記録がない。長期にわたり採集例がないが、小笠原諸島産のコウヤクタケ類は十分に調査されていないため正確な発生状況が不明であり、調査の継続が必要である。

【参考文献】 25)、66)

執筆者：服部 力（森林総合研究所）

ヒダナシタケ目 イボタケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## マツノシハリタケ *Bankera fuligineoalba* (J. C. Schmidt) Coker & Beers ex Pouzar

子実体は有柄。傘は径 5~15cm、平たい丸山形~ほぼ平ら、淡黄褐色~褐色、周辺は白色。肉は白色~灰白色、柔軟、切断面は放射状の紋様をあらわす。味は淡白、香ばしいきのこ臭がある。子実層托は針状、柄に垂生。針は密生し、白色、長さ 1cm 程度。柄は太短く、中心生、中実、強靭。表面は平滑で白~淡褐色。担子胞子は類球形、表面はイボ状、無色、径 3.5~5μm。日本、ヨーロッパ、北アメリカに分布。マツ林に依存する菌根菌である。松枯れや生育環境の悪化により、発生の減少傾向が見られるが、引き続き調査が必要である。

【参考文献】 23)

執筆者：工藤伸一（甲草塾菌草研究会）

ヒダナシタケ目 イボタケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## クロカワ *Boletopsis leucomelaena* (Pers.) Fayod

子実体は有柄、傘は径 5~20cm、ほぼ円形で表面は灰色~黒灰色、ビロード状~ほぼ無毛。傘肉は類白色、傷つけると暗色になる、肉質で苦みをもつ。子実層托は管孔状、孔口面は白色~灰色。柄は円筒形~棍棒形で灰色~黒灰色。担子胞子は類球形で表面にイボを帯びる、5~6.5×4~5μm。北半球に広く分布。マツ林などの針葉樹林内地上に発生、菌根を形成する。現時点では絶滅の危険性は低いが、マツ枯れ等により発生環境が悪化、発生量が減少しており、調査の継続が必要である。

【参考文献】 23)

執筆者：服部 力（森林総合研究所）

ヒダナシタケ目 ニンギョウタケモドキ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ニンギョウタケ *Albatrellus confluens* (Alb. & Schwein.) Kotl. & Pouzar

子実体は有柄、しばしば分岐し、複数の傘が形成される。傘は径 15cm に達する、ほぼ円形~不定形でしばしば複数が凝着する、表面は類白色~淡橙色、無毛平滑。傘肉は類白色、柔軟な肉質。子実層托は管孔状、孔口面は類白色。柄は棍棒状で、偏心生。担子胞子は短楕円形~類球形、4~5×2.5~3.5μm。北半球に広く分布。マツ林などの針葉樹林内地上に発生、菌根を形成する。現時点では絶滅の危険性は低いが、マツ枯れ等により発生環境が悪化、発生量が減少しており、調査の継続が必要である。

【参考文献】 23)

執筆者：服部 力（森林総合研究所）

ヒダナシタケ目 タバコウロコタケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## エヒメウスバタケ *Hydnochaete tabacina* (Berk. & M.A. Curtis ex Fr.) Ryvarden

子実体は半背生~ほとんど背生、基質上に広くひろがる。傘は不定形~棚形、幅 0.5~2cm、表面は毛を帶び、褐色、繊維状光沢をもつ。傘肉は黄褐色、薄く強靭な革質。子実層托は細かい針状、黄褐色~灰褐色。担子胞子はソーセージ形、5~6×1~1.5μm。広葉樹枯木上に発生する。北米および東アジアに分布。国内では本州および四国の数か所の暖温帯林から知られているが発生は稀。暖温帯林の伐採、開発により生育地が著しく減少しているが、調査の継続が必要である。

【参考文献】 25)

執筆者：服部 力（森林総合研究所）

ヒダナシタケ目 タバコウロコタケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## カバノアナタケ *Inonotus obliquus* (Ach. ex Pers.) Pilát

子実体は背着生であるが、樹皮下に形成されることが多く目立たない。人目につく部分は菌核である。菌核はときに径 20 cm 以上に達し、塊状、表面は黒色で石炭様、不規則にひび割れる。内部は黄褐色、木質～やや纖維質。子実層托は管孔状、孔口面は褐色。担子胞子は無色～淡褐色、短橢円形、8～10×6～8μm。カンバ類の立木幹上に発生。北半球に分布。近年民間薬として注目されている。かつては各地のカンバ林で普通に見られたが、近年乱獲により急速に発生が減少しており、調査の継続が必要である。

【参考文献】 24)、76)

執筆者：服部 力（森林総合研究所）

ケシボウズタケ目 ケシボウズタケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ケシボウズタケ *Tulostoma brumale* Pers.

子実体は幼時地中生で類球形、成熟すると柄部が伸長し頭部と柄の上部が地表に出る。頭部は径 7～9mm、柄は 14～45×1.5～3mm。殻皮は 2 層、外皮は黄褐色～赤褐色、砂粒を巻き込み、頭部下側などに残存する。孔口は筒状でわずかに突出する。北米、欧州、豪州、東南アジアなどに分布し、日本では本州（新潟、福島、愛知）～九州（長崎）の、主に海浜砂地や荒れ地に発生する。類似種との混同も見られ、現時点での絶滅の危険性は低いが、生育依存環境である自然な海浜砂地は急激に減少しており、引き続き調査が必要である。

【参考文献】 23)、26)、90)、92)

執筆者：浅井郁夫／吹春俊光（千葉県立中央博物館）

ケシボウズタケ目 ケシボウズタケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## アラナミケシボウズタケ *Tulostoma fimbriatum* var. *fimbriatum* Fr.

子実体は幼時地中生で類球形。成熟すると柄部が伸長し、頭部と柄の上部が地表に出る。頭部は径 8～15mm、柄は 20～50×3～5mm。殻皮は 2 層で、外皮は灰褐色～赤褐色、砂粒を巻き込み、頭部下側などに襟状に残る。内皮は灰白色。北米、南米、欧州、中東、ロシア、中国などに分布し、日本では本州（新潟）～九州の主に暖地の海浜砂地などに見られる。しばしば、ナガエノホコリタケと混同されてきた。現時点での絶滅の危険性は低いが、生育依存環境である自然な海浜砂地は急激に減少しており、引き続き調査が必要である。

【参考文献】 69)、90)

執筆者：浅井郁夫／吹春俊光（千葉県立中央博物館）

ケシボウズタケ目 ケシボウズタケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ナガエノホコリタケ *Tulostoma fimbriatum* var. *campestre* (Morgan) G. Moreno

子実体は幼時地中生で類球形、成熟すると柄部が伸長し、頭部と柄の上部が地表に出る。頭部は径 10～25mm、柄は 20～100×3～8mm。殻皮は 2 層、外皮は灰褐色～赤褐色、砂粒を巻き込み、頭部下側などに襟状に残る。柄は赤褐色で鱗片状。アフリカ、北米、欧州、ロシア、中国に分布し、日本では本州（新潟等）、四国、九州の海浜砂地や草の茂った砂地に見られる。アラナミケシボウズタケと混同されてきた。現時点での絶滅の危険性は低いが、生育依存環境である自然な海浜砂地は急激に減少しており、引き続き調査が必要である。

【参考文献】 23)、26)、69)、90)

執筆者：浅井郁夫／吹春俊光（千葉県立中央博物館）

ケシボウズタケ目 ケシボウズタケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ウネミケシボウズタケ *Tulostoma striatum* G. Cunn.

子実体は幼時地中生で球形。成熟すると柄部が伸長し、頭部と柄の上部が地表に出る。頭部は径 8~16mm、柄は 25~50×2~5mm。殻皮は 2 層、外皮は砂粒を巻き込み、頭部下側に房飾状に残る。内皮は平滑で肌色。孔口はやや乳頭状に隆起する。胞子表面に明瞭に隆起した肋骨状の刻紋をもつ。北米、南米、豪州等に分布し、日本では本州（新潟、福島、石川、千葉）のコウボウムギなどが生える海浜砂地に見られる。現時点での絶滅の危険性は低いが、生育依存環境である自然な海浜砂地は急激に減少しており、引き続き調査が必要である。

【参考文献】 1)、18)、90)

執筆者：浅井郁夫／吹春俊光（千葉県立中央博物館）

ホコリタケ目 ホコリタケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ハマベダンゴタケ *Bovista dryina* (Morgan) Demoulin

子実体は球形、径 18~25mm。外皮は黄褐色～灰褐色の疣状突起からなる。内皮は紙質、赤褐色～暗褐色、担子胞子は球形～類球形、径 4~5.5μm。弾糸は幅 6μm に達し、稀に分枝し、小孔を欠く。海浜生植物が繁茂する砂浜海岸に、初夏に局地的に単生～散生する。北米、南米、カナリー諸島等に分布し、日本では 2003 年千葉県富津市で採集された。生育環境である自然で良好な海浜砂地は急激に減少しており希少性も高いと考えられるが、近年になって記録された種で分布の実態に不明な部分も多く。引き続き調査が必要である。

【参考文献】 29)

執筆者：吹春俊光（千葉県立中央博物館）／糟谷大河（筑波大学）

スッポンタケ目 アカカゴタケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ツクシタケ *Lysurus gardneri* Berk.

菌蕾は長卵形、30×25mm、白色あるいは部分的に淡褐色を帯びる。托は三角柱または四角柱で、60~100×5~17mm、基部は細くなり、白色、海綿質でもろく、中空。托枝は 4~5 本、腕状、高さ 30~40mm、頂部で結合するが離れて反り返り、赤色、表面に横じわがある。グレバはオリーブ褐色から緑褐色あるいは黒色、腐敗臭を放つ。担子胞子は円筒状の橢円形、3~5×1.5~2μm、無色または淡褐色、平滑。路傍等で採集されており、移入種の可能性もある。今後調査の継続が必要である。

【参考文献】 23)、28)

執筆者：根田 仁（森林総合研究所）／糟谷大河（筑波大学）

スッポンタケ目 スッポンタケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## タヌキノベニエフデ *Mutinus elegans* (Mont.) E. Fisch.

菌蕾は亜球形から卵形、15~50mm×10~27mm、白色あるいは部分的に淡褐色。托は、90~220×10~30mm、頂部が細まった角状円柱形で、鈍頭、小さな頂孔（径 2~3mm）をもつ。托の柄部は淡紅赤色～珊瑚赤色、頭部は柄部と同色か多少暗色。頭部を覆うグレバは暗オリーブ色から暗オリーブ褐色、強い悪臭を放つ。担子胞子は円筒状橢円形、4~5×1.8~2μm、平滑、淡灰緑色。道端や開放地などのよく陽の当たる場所で樹下地上に発生、移入種の可能性もある。採集例が大阪府下での 1 例のみで、今後調査の継続が必要である。

【参考文献】 8)

執筆者：根田 仁（森林総合研究所）／糟谷大河（筑波大学）

スッポンタケ目 プロトファルス科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ニカワショウロ *Protuberella borealis* (S. Imai) S. Imai & Kawam.

子実体は半地中生、偏球状または塊状、径 20~50mm、表面は白色。皮層は厚さ 0.5~1mm、寒天質で白色。子実体内部には基本体からなる長形の緑褐色の小区画が放射状に並ぶ。小区画の間は寒天状の組織で充満している。小区画の内部に小室が密にでき、小室の内壁に子実層が発達する。担子胞子は長楕円形、4~4.5×1.2~2.2μm、淡黄緑色。スギ林内に発生する。主に山地のブナ科落葉広葉樹林やモミ林に分布する。希少性が高く分布も局在しているが、存続を脅かす要因が不明である。

【参考文献】 20)、33)

執筆者：根田 仁（森林総合研究所）／糟谷大河（筑波大学）

---

ヒメノガステル目 ショウロ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ホンショウロ *Rhizopogon luteolus* Fr.

子実体は半地中生、偏球状または卵形、洋梨形、径 15~30mm、はじめ白色、すぐに帶黃色になり、淡赤褐色に変わる。空気に触れても急変はしない。すこし悪臭がする。表面には菌糸束がまとわりつく。皮層は 300~450μm、膜質または強靭な肉質。基本体は最初淡緑褐色、後に濃褐色。小室は円形、長形または迷路状。担子胞子は長楕円形または紡錘形、7.5~12.5×3.5~5μm、2~3 個の油滴を含む。外生菌根菌。全世界に分布するが、日本からは、小笠原諸島の 1か所から記録されている。今後周辺地域での生育状況を調査する必要がある。

【参考文献】 32)、33)

執筆者：根田 仁（森林総合研究所）／糟谷大河（筑波大学）

---

ヒメノガステル目 ショウロ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ショウロ *Rhizopogon rubescens* (Tul.) Tul.

子実体は半地中生、卵形、偏球形、径 10~60mm。表面は地下にあるときは白色だが、後に黄色となり、空気に触れると淡紫赤褐色または淡赤褐色。表面に菌糸束が密着する。皮層は膜状で薄く、厚さ 160~220μm。基本体はやや粘性のある肉質で、はじめ白色だが成熟すると黄褐色。小室は球状または迷路状。担子胞子は 9~14×3.5~4.2μm、1~2 個の油滴を含む、平滑、無色または淡黄色。外生菌根菌であり、海岸のクロマツ林の環境悪化に伴って減少が危惧される。引き続き調査が必要である。

【参考文献】 23)、33)

執筆者：根田 仁（森林総合研究所）／糟谷大河（筑波大学）

## 付属説明資料 菌類 参考文献

- 1) 浅井郁夫, 2004. 日本産 *Tulostoma striatum* について. 日菌報, 45: 11-13.
- 2) Asai, I., Sato H. and Nara, T., 2004. *Pseudotulostoma japonica*, comb. nov. (= *Battarrea japonica*), a species of the Eurotiales, Ascomycota. Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser. B, 30: 1-7.
- 3) Coker, W. C. and J. N. Couch, 1928. The Gasteromycetes of the Eastern United States and Canada. Univ. North Carolina Press. 201pp. pls.1-123.
- 4) Corner, E. J. H. 1954. Further descriptions of luminous Agarics. Trans. Brit. Mycol. Soc., 37: 256-271.
- 5) Corner, E. J. H. 1972. *Boletus* in Malaysia. The Botanic Gardens Singapore, Singapore. 263 pp. pls 1-23.
- 6) Dring, D. M. 1980. Contributions towards a rational arrangement of the Clathraceae. Kew Bull., 35: 1-96.
- 7) 吹春俊光・腰野文男・服部力・大作晃一・小沼良子, 2002. 千葉県菌類誌(II). 大型担子菌類追加目録. 千葉中央博自然誌研究報告特別号, 5: 95-110.
- 8) Guez, D.・長沢栄史, 2000. 日本新産種 *Mutinus elegans* (腹菌類, スッポンタケ科) について. 日菌報, 41: 75-78.
- 9) 羽根田弥太, 1985. 発光生物. p.33. 恒星社厚生閣, 東京.
- 10) Hariot, M. M. and Patouillard, N., 1902. Liste des champignons recoltes au Japon par M. le Dr. Harmand. Bull. Mus. Nat. Hist., 8: 129-133.
- 11) Hesler, L. R. 1967. *Entoloma* in Southeastern North America. Beihefte zur Nova Hedwigia, 23: 1-196.
- 12) Hongo, T., 1968. Notulae mycologicae (7). Mem. Shiga Univ. Nat. Sci., 18: 47-52.
- 13) Hongo, T., 1978. Higher fungi of the Bonin Islands II. Rept. Tottori Mycol. Inst., 16: 59-65.
- 14) Hongo, T., 1980. Higher fungi of the Bonin Islands III. Rept. Tottori Mycol. Inst., 18: 149-155.
- 15) 本郷次雄, 1982. 日本産ヌメリガサ科菌類. 滋賀大学教育学部紀要 (自然科学), 32: 85-92.
- 16) 本郷次雄, 1997. 日本菌類誌資料 (50). 日菌報, 38: 99-100.
- 17) 本郷次雄・金城典子・竹友直生・黄年来・吳經綸・林津添, 1996. 東アジアの常緑ガシ林におけるハラタケ目菌類. 日菌報, 37: 63-64.
- 18) 池田良幸, 2005. 北陸のきのこ図鑑. 橋本確文堂, 金沢市. 394pp. pls 146.
- 19) Imai, S., 1929. On the Fungus-inhabiting *Cordyceps* and *Elaphomyces* in Japan. Transact. Sapporo Nat. Hist. Soc., 11: 33-34.
- 20) Imai, S., 1936. Symbolae ad Floram Mycologicam Asiae Orientalis. I. Bot. Mag. Tokyo., 50: 216-224.
- 21) Imai, S., 1938. Studies on the Agaricaceae of Hokkaido. I. Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ., 43: 1-178.
- 22) 今関六也・本郷次雄 (編著), 1987. 原色日本新菌類図鑑 (I). 保育社, 大阪. 325pp.
- 23) 今関六也・本郷次雄 (編著), 1989. 原色日本新菌類図鑑 (II). 保育社, 大阪. 315pp.
- 24) 今関六也・大谷吉雄・本郷次雄, 1988. 日本のきのこ. 山と渓谷社, 東京. 623pp.
- 25) 伊藤誠哉, 1955. 日本菌類誌. 第2巻第4号. 養賢堂, 東京. 450pp.
- 26) 伊藤誠哉, 1959. 日本菌類誌. 第2巻第5号. 養賢堂, 東京. 658pp.
- 27) Ito, S. and Imai, S., 1939. Fungi of the Bonin Islands. III. Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc., 16: 9-20.
- 28) 糧谷大河, 2004. 日本より再発見された *Lysurus gardneri* (スッポンタケ目, アカカゴタケ科) について. 日菌報, 45: 39-41.
- 29) Kasuya, T., 2004. Gasteromycetes of Chiba Prefecture, Central Honshu, Japan. I. The family Lycoperdaceae. J. Nat. Hist. Mus. Inst., Chiba, 8: 1-11.
- 30) 糧谷大河・竹橋誠司・山上公人, 2007. 日本から再発見された3種のスッポンタケ属菌. 日菌報, 48: 44-56.
- 31) 川村清一, 1954. 原色日本菌類図鑑. 第4巻, p.401. 風間書房, 東京.
- 32) Kobayasi, Y., 1937. Fungi Austro-Japoniae et Micronesiae. II. Bot. Mag. Tokyo. 51: 797-804.
- 33) 小林義雄, 1938. 大日本植物誌2 ヒメノガスター亜目及スッポンタケ亜目. 三省堂, 東京. 90pp.
- 34) Kobayasi, Y., 1960. *Ascosparrassis*, a new genus of discomycetes.. Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo, 51: 44-46.

- 35) Kobayasi, Y., 1960. Monographic studies of *Cordyceps* 1. Group parasitic on *Elaphomyces*. Bull. Nat. Sci. Mus., Tokyo, 5(2): 79.
- 36) Kobayasi, Y., 1966. Two white mutants of the members of *Cordyceps*. Trans. Mycol. Soc. Japan, 7(2,3): 350-351.
- 37) Kobayasi, Y., 1981. Revision of the Genus *Cordyceps* and Its Allies 1. Bull. Natn. Sci.. Mus., Tokyo, B 7(1): 6. figs.7,8.
- 38) Kobayasi, Y., 1981. Revision of the Genus *Cordyceps* and Its Allies 1. Bull. Natn. Sci.. Mus., Tokyo, B 7(1): 8-9. fig.9.
- 39) Kobayasi, Y., 1984. Miscellaneous notes of fungi (4). J. Jap. Bot., 59(1): 31-32. fig.1.
- 40) 小林義雄・清水大典, 1983. 冬虫夏草菌図譜. 保育社, 大阪. 280pp.
- 41) Kobayasi, Y. and Shimizu, D., 1963. Monographic studies of *Cordyceps* 2. Group parasitic on Cicadidae. Bull. Nat. Sci.. Mus., Tokyo, 6: 294. pl.40. fig.3.
- 42) Kobayasi, Y. and Shimizu, D., 1963. Monographic studies of *Cordyceps* 2. Group parasitic on Cicadidae. Bull. Nat. Sci.. Mus., Tokyo, 6: 292-293. pl.39. fig.2.
- 43) Kobayasi, Y. and Shimizu, D., 1978. *Cordyceps* Species from Japan. Bull. Nat. Sci.. Mus., Tokyo, 4(2): 46-47. figs. 4,19.
- 44) Kobayasi, Y. and Shimizu, D., 1978. *Cordyceps* Species from Japan. Bull. Nat. Sci.. Mus., Tokyo, 4(2): 51-52. figs.8,20.
- 45) Kobayasi, Y. and Shimizu, D., 1978. *Cordyceps* Species from Japan. Bull. Nat. Sci.. Mus., Tokyo, B 4(2): 43-44. figs.1,17.
- 46) Kobayasi, Y. and Shimizu, D., 1978. *Cordyceps* Species from Japan. Bull. Nat. Sci.. Mus., Tokyo, B 4(2): 53-54. figs.10,19.
- 47) Kobayasi, Y. and Shimizu, D., 1980. *Cordyceps* Species from Japan 2. Bull. Nat. Sci.. Mus., Tokyo, B 6(3): 85-86. figs.11,21.
- 48) Kobayasi, Y. and Shimizu, D., 1980. *Cordyceps* Species from Japan 3. Bull. Nat. Sci.. Mus., Tokyo, B 6(4): 138-139. figs.17,23.
- 49) Kobayasi, Y. and Shimizu, D., 1980. *Cordyceps* Species from Japan 3. Bull. Nat. Sci.. Mus., Tokyo. B 6(4): 128-130. figs.5-7.
- 50) Kobayasi, Y. and Shimizu, D., 1981. The Genus *Cordyceps* and Its Allies from Taiwan (Formosa). Bull. Nat. Sci.. Mus., Tokyo, B 7(4): 85. figs.2,5.
- 51) Kobayasi, Y. and Shimizu, D., 1982. *Cordyceps* Species from Japan 4. Bull. Nat. Sci.. Mus., Tokyo, B 8(3): 88-91. figs.11,16.
- 52) Kobayasi, Y. and Shimizu, D., 1982. *Cordyceps* Species from Japan 5. Bull. Nat. Sci.. Mus., Tokyo, B 8(4): 111-112. figs.1,14.
- 53) Kobayasi, Y. and Shimizu, D., 1982. *Cordyceps* Species from Japan 5. Bull. Nat. Sci.. Mus., Tokyo, B 8(4): 112-113. figs.3,14.
- 54) Kobayasi, Y. and Shimizu, D., 1982. *Cordyceps* Species from Japan 5. Bull. Nat. Sci.. Mus., Tokyo, B 8(4): 114. figs. 6,15.
- 55) Kobayasi, Y. and Shimizu, D., 1982. *Cordyceps* Species from Japan 5. Bull. Nat. Sci.. Mus., Tokyo, B 8(4): 118. figs. 11,16.
- 56) Kobayasi, Y. and Shimizu, D., 1982. Monograph of the Genus *Torrubiella*. Bull. Nat. Sci.. Mus., Tokyo, 8(2): 68. figs. 35,37.
- 57) Kobayasi, Y. and Shimizu, D., 1982. Monograph of the Genus *Torrubiella*. Bull. Nat. Sci.. Mus., Tokyo, 8(2): 61-62. figs.26,28.
- 58) Kobayasi, Y. and Shimizu, D., 1982. *Cordyceps* Species from Japan 4. Bull. Nat. Sci.. Mus., Tokyo, B 8(3): 83. fig.5,14.
- 59) Kobayasi, Y. and Shimizu, D., 1982. *Cordyceps* Species from Japan 4. Bull. Nat. Sci.. Mus., Tokyo, B 8(3): 86-87. fig.9,15.
- 60) Kobayasi, Y. and Shimizu, D., 1983. *Cordyceps* Species from Japan 6. Bull. Nat. Sci.. Mus., Tokyo, B 9(1): 2-3. figs.3,25.
- 61) Kobayasi, Y. and Shimizu, D., 1983. *Cordyceps* Species from Japan 6. Bull. Nat. Sci.. Mus., Tokyo, B 9(1): 4-7. fig.7.

- 62) Kobayasi, Y. and Shimizu, D., 1983. *Cordyceps* Species from Japan 6. Bull. Nat. Sci. Mus., Tokyo, B 9(1): 7-8. figs.11,26.
- 63) Korf, R. P., 1963. Discomycete flora of Asia, precursor II. Revision of the genera *Acervus* and *Ascosparsassis* and their new positions in the Pezizales. Lloydia, 26: 21-26.
- 64) Koval, E. Z., 1964. De Fungo novo Kordyceps pentatomi notula. Nov. Sist. Niz. Rast., 166-168. figs.1,2.
- 65) 工藤伸一・手塚豊・米内山宏, 1998. 青森のきのこ. グラフ青森, 青森. 288pp.
- 66) Maekawa, N., 1993. Taxonomic study of Japanese Corticiaceae (Aphyllophorales) I. Rept. Tottori Mycological Institute 31: 1-149.
- 67) Masuya, H. and Asai, I., 2004. Phylogenetic position of *Battarrea japonica* (Kawam.) Otani. Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser. B, 30: 9-13.
- 68) 丸山厚吉・安藤洋子, 2000. アカハナビラタケ *Ascosparsassis shimizuensis*. 日菌報, 41: 61-62.
- 69) 松田一郎, 1993. きのこ漫筆 その2 思い出の砂丘のきのこ. 新潟きのこ同好会報 どうしん, 3号: 2-5.
- 70) 長尾英幸・黒木秀一, 2001. 宮崎県および隣接域の盤菌類 (1). 宮崎県総合博物館研究紀要, 22: 143-151.
- 71) Nagasawa, E. and T. Hongo, 1984. New taxa of *Amanita*, Three new species and one new form from western Japan. Trans. Mycol. Soc. Japan 25: 367-376.
- 72) 長沢栄史・工藤伸一, 1992. 日本新産種 *Creolophus cirratus* (フサハリタケー新称) について. 菌蕈研報, 30: 69-74.
- 73) 長沢栄史・工藤伸一, 2003. 青森県で再発見されたヤチヒロヒダタケ *Armillaria ectypa* について. 菌蕈研報, 41: 26-34.
- 74) Neda, H. 2004. Type studies of *Pleurotus* reported from Japan. Mycoscience, 45: 181-187.
- 75) 根田仁・佐藤大樹, 2008. 日本の亜熱帯地域から報告されたハラタケ型菌類一覧. 日菌報, 49: 64-90.
- 76) Núñez, M. and Ryvarden L., 2000. East Asian Polypores. Vol. 1. Fungiflora, Oslo. pp1-168.
- 77) Núñez, M. and Ryvarden L., 2001. East Asian Polypores. Vol. 2. Fungiflora, Oslo. pp169-522.
- 78) 大谷吉雄, 1974. 沖縄石垣島で発見されたキアミヅキンタケ. 日菌報, 15: 243-244.
- 79) 大谷吉雄, 1982. 興味深い日本産チャワンタケ2種について. Trans. Mycol. Soc. Japan, 23: 379-384.
- 80) Pegler, D. N., 1983. The genus *Lentinus*: a world monograph. p. 52-53. HMSO, London.
- 81) Pegler, D. N., P. J. Roberts and B. M. Spooner, 1997. British Chanterelles and Tooth-Fungi. Royal Botanic Gardens, Kew, 114pp.
- 82) Penz. and Saccardo, 1904. Icon. Fung. Java., p.57. pl.39.
- 83) Petch, T., 1937. Notes on Entomogenous Fungi. Trans. Brit. Mycol. Soc., 21: 39.
- 84) Petch, T., 1944. Note on Entomogenous fungi. Trans. Brit. Mycol. Soc., 27: 84-85.
- 85) Pouzar, Z., 1975. Two rare Japanese species of the Genus *Albatrellus* (Polyporaceae). Folia Geobot. Phytotax., Praha, 10: 197-203.
- 86) Sato, H., T. Hattori, S. Kurogi and T. Yumoto, 2005. *Strobilomyces mirandus* Corner, a new record from Japan. Mycoscience, 46: 102-105.
- 87) 佐藤正己・鈴木昌友, 1956. 稀菌コウボウフデについて. 植物研究雑誌, 31: 111-114.
- 88) 清水大典, 1994. 原色冬虫夏草図鑑. 誠文堂新光社, 東京. 381pp.
- 89) 清水大典, 1997. 冬虫夏草図鑑. 家の光協会, 東京. 446pp.
- 90) Wright, J. E., 1987. The genus *Tulostoma* (Gasteromycetes). A world monograph. Biblioth. Mycol., 113: 1-338.
- 91) 吉見昭一, 2001. 腹菌類の分類—日本産 ケシボウズタケ科, コウボウフデ科, クチベニタケ科. 菌学教育研究会. 32pp.
- 92) 幼菌の会編, 2001. きのこ図鑑. 家の光協会, 東京. 335pp.
- 93) Zhuang, W., 1988. Studies on some discomycete genera with an ionomidotic reaction: *Ionomidotis*, *Polonioidiscus*, *Cordierites*, *Phylloomyces*, and *Ameghiniella*. Mycotaxon, 31: 261-298.

## 和名索引

アカダマスッポンタケ	CR+EN	6	シロトガリクモタケ	DD	17
アカダマノオオタイマツ	VU	10	シロハナヤスリタケ	CR+EN	3
アカハナビラタケ	DD	14	シロマツタケモドキ	NT	12
アキノアシナガイグチ	DD	20	タヌキノベニエフデ	DD	23
アブヤドリタケ	CR+EN	3	タンポヤンマタケ	VU	7
アミラッパタケ	EX	2	チョレイマイタケ	NT	13
アラゲカワウソタケ	VU	9	ツクシタケ	DD	23
アラナミケシボウズタケ	DD	22	ツバヒラタケ	DD	17
イネゴセミタケ	CR+EN	4	トガリフカアミガサタケ	DD	14
ウスアカシャクトリムシタケ	NT	11	トビシマセミタケ	VU	7
ウスイロヒメフトバリタケ	DD	14	トライグチ	DD	20
ウネミケシボウズタケ	DD	23	トワダミドリクチキムシタケ	DD	16
ウロコケシボウズタケ	VU	10	ナガエノホコリタケ	DD	22
エゾハナヤスリタケ	VU	7	ナガエノヤグラタケ	DD	18
エヒメウスバタケ	DD	21	ナガボノケンガタムシタケ	CR+EN	4
オオズキンカブリ	DD	13	ナンバンオオカワウソタケ	VU	9
オガサワラクモタケ	DD	16	ニカワショウロ	DD	24
オグラムシタケ	DD	16	ニセカンバタケ	EX	2
オニノケヤリタケ	CR+EN	6	ニセマツタケ	NT	11
カバノアナタケ	DD	22	ニンギョウタケ	DD	21
カンザシセミタケ	CR+EN	4	ニンギョウタケモドキ	VU	8
カンバタケモドキ	CR+EN	5	ヌメリアイタケ	VU	9
キアミズキンタケ	CR+EN	6	ネッタイアカヌメリガサ	DD	17
キイロクビオレタケ	DD	14	バカマツタケ	VU	8
キツネノサカズキ	VU	6	ハチマキイヌシメジ	DD	18
キヌオオフクロタケ	DD	19	ハネカクシヤドリタケ	CR+EN	5
キビノムシタケモドキ	DD	16	ハマベダンゴタケ	DD	23
クサナギヒメタンポタケ	DD	15	ヒメタンポタケ	DD	15
クビオレカムシタケ	CR+EN	5	ヒュウガサラタケ	DD	13
クビナガクチキムシタケ	VU	7	フサハリタケ	NT	12
クロカワ	DD	21	ヘゴシロカタハ	EX	2
クログキヤマタケ	DD	17	ヘゴノコウヤクタケ	DD	20
クロムラサキハナビラタケ	NT	10	ホンショウロ	DD	24
ケシボウズタケ	DD	22	マツタケ	NT	12
ケラタケ	DD	15	マツタケモドキ	NT	12
コウボウフデ	DD	13	マツバハリタケ	DD	21
コゴメセミタケ	DD	15	ミオモテタンポタケ	CR+EN	3
コササクレシロオニタケ	DD	19	ミドリトサカタケ	CR+EN	4
コナガエノアカカゴタケ	VU	10	ムニンヌメリカラカサタケ	DD	19
ササナバ	VU	8	メシマコブ	VU	9
シイノトモシビタケ	NT	11	ヤエヤマコメツキムシタケ	NT	11
シシタケ	VU	8	ヤチヒロヒダタケ	CR+EN	5
シモコシ	DD	18	ヤマドリタケ	DD	20
ショウロ	DD	24	ワカクサウラベニタケ	DD	19
シロタマゴクチキムシタケ	CR+EN	3	和名なし	EX	2
シロタモギタケ	DD	18			

### 改訂レッドリスト 付属説明資料

#### 菌 類

平成 22 年 3 月

編集・発行 環境省自然環境局野生生物課

エコマーク認定の再生紙を使用しています。(古紙含有率 100%)